

宮崎公立大学学生の進路選択 自己効力の要因としての遂行体験

Performance Accomplishment As A Factor of Career Decision-Making Self-Efficacy in The Student of Miyazaki Municipal University

川 瀬 隆 千

進路選択自己効力は進路選択において必要な行動を成功裡に行うことができる能力に関する自己評価である。進路選択自己効力が高い人は進路選択行動や就職活動を積極的に行うことが知られている。したがって、大学での諸活動によって、学生の進路選択自己効力が高められることが望ましい。講義やゼミで勉強や研究に取り組むこと、サークルやボランティア活動、アルバイトなどでさまざまな経験を積むことは就職に有利であると言われているが、大学内外の活動に積極的に取り組み、それらの活動を通して、成功体験や達成経験を積むことは進路選択自己効力を高めると期待できる。特に、宮崎公立大学（本学）ではゼミ活動や外国語修得に力を入れている。それらの活動への積極的取り組みとその結果としての成功体験は、学生の進路選択自己効力を高めるだろう。向上した進路選択自己効力は積極的な進路探索活動を促すだろう。この仮説を検証するため、本学学生にアンケート調査を実施した。その結果、講義や予習復習への取り組みとその成果、資格取得への取り組みや語学学習の成果、地域活動への取り組みやアルバイトの成果は進路選択自己効力を高め、高められた進路選択自己効力は進路探索行動を促進していた。しかし、スポーツディなどの学内活動、サークルや部活動、ゼミへの取り組みやその成果が進路選択自己効力を高める効果は認められなかった。このような結果について考察した。

キーワード：進路選択自己効力、遂行体験、大学生、進路探索行動、重回帰分析

目 次

- 1 はじめに
- 2 方法
 - 2-1 調査対象者と調査手続き
 - 2-2 調査項目
- 3 結果
 - 3-1 大学内外での活動への取り組みとその成果

- 3-2 進路選択自己効力得点
 - 3-3 進路探索行動得点
 - 3-4 大学内外での取り組み・成果が進路選択自己効力に及ぼす影響
 - 3-5 進路選択自己効力と進路探索行動との関係
- 4 考察
- 5 参考文献
-

1 はじめに

職業やライフコースの多様化、雇用の流動化、ワークライフバランスの進展など、現代社会においては産業構造、就業構造が大きく変化しており、これまで以上に主体的なキャリア開発が必要になってきている。現代は個人が自分の責任で主体的にキャリアを開発しなければならない時代なのである。

大学生にとっても状況は同じである。在学中に将来の進路、自分自身のキャリアについて真剣に考え、自ら進路を選択・決定し、その進路に適応していくことが求められている。

しかし、自ら進路を選択・決定し、その進路に適応していくことは容易なことではない。進路指導は多くの場合、高校段階で進学指導という形で行われ、大学入学という目的を果たした後は、本人の適性を考慮した進路指導や職業カウンセリングはほとんど行われない。経験の少ない大学生にとっては、自分にあった進路を選択し、決定することはきわめて困難なものなのである。進路選択・進路決定に対する自信を「進路選択自己効力」と呼ぶが、この困難なプロセスに対する自信、すなわち、進路選択自己効力は進路選択行動に大きな影響を及ぼす重要な変数となりうる。

自己効力とはある行動が自分にうまくできるかどうかという予期の認知である。自己効力はどのくらいの努力をするか、困難に直面した際にどのくらい耐え得るかに影響する要因であり、強い自己効力を持つ人は、たとえ限られた能力であっても、自分の能力をうまく働かせ、さらに努力することができる。

Bandura (1977) は期待概念に関して効力期待と結果期待を区別し、所与の行動がある結果に至るであろうという査定を「結果期待」、その結果に必要な行動を成功裡に実行できるという確信を「効力期待」とした。一連の行動がある結果を生むと分かっていたとしても、自らが必要とされる行動を遂行できるかどうかを疑っていれば（つまり、効力期待が低ければ）、結果期待は行動に影響しない（つまり、そのような行動をしない）。このように、行動に影響を及ぼすのは結果期待ではなく、その行動を成功裡に実行できるという確信、すなわち、効力期待である。効力期待を自己効力と呼ぶ。

Taylor & Betz (1983) は、Bandura (1977) の自己効力理論を進路選択行動に応用し、「進

路選択自己効力」という概念を提唱した。進路選択自己効力は進路選択において必要な行動を成功裡に行うことができる能力に関する自己評価である。

大学生の進路選択自己効力は彼らの進路選択行動と関連する。浦上（1995）は、進路選択自己効力が高い人は進路選択行動を活発に行い、より努力するため、その行動は効果的になるが、進路選択自己効力の低い人はそれらの行動が自分の人生の目的を達成するために必要であると理解できて、進路選択行動を避けてしまう、と述べている。

進路選択自己効力が高い学生は積極的に就職活動をする。早くから就職活動に取り組み、就職に関する情報を活発に収集し、活用する。進路選択自己効力は「就職のための勉強を始めた時期」「職場訪問を始めた時期」「就職に関することで年長者と相談した時期」と相関することが知られている（富安，1997）。進路選択自己効力が高いものほど、友人など身近な者からの情報や目上の者からの情報の活用が活発で、企業に採用してもらおうためのノウハウの入手に積極的（児玉・松田・戸塚・深田，2002）であると言われる。

このように、進路選択自己効力が高い人は進路選択行動や就職活動を積極的に行う。その結果、進路選択自己効力が高いものは就職の内定を得やすい。さらに、内定先への満足感や就職後の仕事に対する意欲も高いのである（浦上，1994）。

自己効力は行動変容のために操作可能な要因（浦上，1996）であるが、進路選択自己効力を高める要因にはどのようなものが考えられるのだろうか。自己効力を喚起させる情報源として、Bandura（1977）は、①遂行行動の達成、②代理体験、③言語的説得、④情緒喚起をあげている。

まず、遂行行動の達成について考えてみる。遂行行動の達成は自己効力を高める。実際に就職活動を経験した学生は少ないが、大学進学など過去の達成経験によって、進路選択自己効力を高めることができる（浦上，1995）。アルバイトの経験が進路選択自己効力と関連する可能性も大きいし、インターンシップへの参加は進路選択自己効力を高めるだろう。ただし、Bandura（1977）は、ある課題について成功裡に遂行する経験をしても、それが教師・幸運・運命などのおかげであると認知されると、自己効力が増大することはないと述べている。

次に、代理体験について考えてみる。富永（2000）は代理経験として先輩や恋人などの生き方モデルと進路選択自己効力（特に、将来展望と計画立案、就職における自己把握）との相関関係を確認している。進路選択過程はこれまで経験したことのない新しい、不確実なものであるため、個人的達成のみでは捉えきれず、代理経験が重要な情報源になっていると思われる。課題を成功裡に遂行するモデル（先輩など）を観察することは自己効力を高める（浦上，1995）し、成功体験を読むと言う代理経験も目標達成行動に関わる自己効力を高める。

次に、言語的説得についてはアドバイスなどの言語的情報と進路選択自己効力との関係が検討されている。下山・堀（2004）はOB・OGからの情報は就職活動全体の時期を通して重視されやすく、希望の内定先を得やすくすると述べている。また、友人や目上の人からの情報は就職活動の具体的な方法に関するアドバイスが多く、採用してもらおうためのノウハウを入手する手

段となるので、進路選択自己効力が高いものはそれらを積極的に収集しているという。就職活動中の相談相手の数は進路選択自己効力と関連する可能性が高い。

最後に、情動喚起と進路選択自己効力との関係である。西山（2003）の研究から、職業活動に対する不安を低めることで進路選択自己効力を高めることができると考えられる。楠奥（2006）によれば、安住・足立は、就職活動に対する不安を軽減させるグループ活動に参加したものは進路選択自己効力が高くなったと報告している。進路選択行動に対する不安を低減させるような介入により、個人が自分の進路選択自己効力を低く見積もることを避けることができるだろう（浦上，1995）。

このように、進路選択自己効力を高める要因として代理体験の効果が認められ、説得や情動喚起についても一定の効果が報告されている。進路選択自己効力を高めるような介入研究も実施され、一定の効果が認められている（浦上，1996）。しかし、大学生活の中での諸活動が学生一人一人の進路選択自己効力を高めるものであることが望ましい。大学の講義やゼミを通して勉強や研究に取り組むこと、サークル活動やボランティア活動、アルバイト等でさまざまな経験を積むことは就職に有利であると言われている。学内外で活発に活動している学生は自己効力が高い（金城，2008）と言う報告もある。これらのことから、講義やゼミ、サークル活動やボランティア活動、アルバイトなど、大学の内外での活動に積極的に取り組み、それらの活動を通して、成功体験や達成経験を積むことが進路選択自己効力を高めるのではないと考えられる。特に、宮崎公立大学（本学）ではゼミ活動や外国語の修得に力を入れている。それらの活動への積極的な取り組みとその結果としての成功体験は本学学生の進路選択自己効力を向上させると期待できる。そして、そのようにして向上した進路選択自己効力は積極的な進路探索活動を促すだろうと考えられる。

本研究ではこのような仮説を検証するために、本学学生に対するアンケート調査を実施した。

2 方法

2-1 調査対象者と調査手続き

本学人文学部の2年生（69人、男子50人、女子152人）、3年生（85人、男子19人、女子66人）に対して、2015年4月7日（2年生）と2015年4月27日（3年生）の講義時間中に以下の調査用紙への解答を依頼し、回答後、その場で回収した。

2-2 調査項目

以下の3つの項目群からなる冊子を作成した。

1) 大学内外での活動への取り組みとその成果に関する質問

過去1年間の大学内外における活動に対する取り組み状況とその成果について尋ねた。大学内外での学習に関する活動として「ゼミ」「語学」「講義」「大学外での勉強（予習復習）」「資格・免許取得の勉強」の5領域を取り上げ、それぞれの活動についてどの程度真剣に取り組んだかを5段階で尋ねた。同様に、大学内での課外活動等として「サークル・部活動」「スポーツデイなどの学内活動」「友人との付き合い（遊び）」の3領域、大学外での活動として「アルバイト」「ボランティア」「地域で活動」の3領域を取り上げ、それぞれの活動についてどの程度真剣に取り組んだかを5段階で尋ねた（表1参照）。さらに、これら11領域の活動の成果についても5段階で尋ねた。

2) 進路選択自己効力に関する質問

浦上（1995）の作成した「進路選択に対する自己効力尺度」30項目を用いた。この尺度はTaylor & Betz（1983）の作成したCDMSE（Career Decision-Making Self-Efficacy Scale）を参考に作成されている。CDMSEは、目標選択、自己認識、職業情報の収集、将来設計、課題解決の5つの要素から構成される50項目からなる尺度であるが、因子分析を用いた研究では5つの要素に対応する因子が抽出されず、1因子構造であることが指摘されている。CDMSEに倣って作られた「進路選択に対する自己効力尺度」も1因子構造であることが確認されている（浦上，1995）。

3) 進路探索行動に関する質問

富永（2000）、柴田・安住（2011）を参考に進路探索行動に関する15の質問を作成した。富永（2000）は就職活動を終えた女子大学生（4年生）に対し、進路選択行動の内容として、資料請求、OG訪問、セミナー参加、面接試験、筆記試験などへの取り組みを尋ねている。柴田・安住（2011）は大学3年生と4年生に対し、就職活動内容として、HPでの情報収集、就職課での情報収集、就職希望先への資料請求、就職希望先関係者からの情報収集について行ったか否かを尋ねている。本研究では「進路に関する情報収集」「進路に関する相談行動」「進路に関連する活動」を進路探索行動と捉え、以下の15項目のような活動をどの程度行ったかについて、5段階で解答を求めた。

1. 新聞・テレビ・雑誌・ネットなどで将来の進路に関する情報を探す
2. 希望する進路先のホームページを見る
3. 就職相談室で、希望する進路先についての情報を収集する
4. 希望する進路先を尋ねる
5. 希望する進路に関わっている人の話を聞く
6. 進路について親と相談する

7. 進路について先生と相談する
8. 進路について就職相談室のスタッフと相談する
9. 進路について目上の人と相談する
10. 進路について先輩と相談する
11. 進路について友だちと相談する
12. 希望する進路を達成するための計画を立てる
13. 資格や免許を取得するための勉強をする
14. 希望する進路に関わるアルバイトやボランティア活動をする
15. 希望する進路に関わる講演会、セミナーなどに参加する

3 結果

3-1 大学内外での活動への取り組みとその成果

表1に、「大学内外での活動への取り組みとその成果」の男女別の平均と標準偏差を示す。本学学生が真剣に取り組んでいるのは、「友人との付き合い（遊び）」(3.86)や「アルバイト」(3.80)、「ゼミ」(3.75)などである。一方、取り組みの程度が低いのは、「地域での活動」(1.59)、「ボランティア」(1.94)、「資格・免許取得の勉強」(2.38)などであった。真剣に活動に取り組めば、高い成果も得られるであろう。「友人との付き合い（遊び）」(3.96)、「アルバイト」(3.73)、「ゼミ」(3.56)、「スポーツディなどの学内活動」(3.56)などで高い成果が得られたようだ。一方、「地域での活動」(1.59)、「ボランティア」(1.94)、「資格・免許取得の勉強」(2.27)などの成果は低いものであったようである。

「語学への取り組み」、「講義への取り組みと成果」、「スポーツディなど学内活動への取り組みと成果」そして「友人との付き合い（遊び）への取り組みと成果」については、男女の間に有意な差が認められ、いずれも女子の方が高かった。さらに、「ボランティア」と「地域での活動」を除き、その他の活動でも女子の方がより真剣に取り組み、高い成果を得ている。女子学生の方が男子学生よりも大学内外のさまざまな活動に真剣に取り組み、成果を得ていると感じていることが分かる。

宮崎公立大学学生の進路選択自己効力の要因としての遂行体験（川瀬隆千）

表1 大学内外での活動への取り組みとその成果（平均・標準偏差）

		取り組み		成果	
ゼミ	全体	3.75	.89	3.56	.91
	男子	3.66	.91	3.41	1.04
	女子	3.77	.88	3.60	.86
語学	全体	3.35	1.04	3.01	1.05
	男子	3.04	1.08	2.81	1.13
	女子	3.44	1.01	3.07	1.02
講義	全体	3.47	.84	3.26	.86
	男子	3.28	.93	3.05	.94
	女子	3.53	.80	3.33	.82
大学外の勉強 (予習・復習)	全体	2.57	.95	2.58	.98
	男子	2.49	1.02	2.58	1.09
	女子	2.59	.92	2.58	.94
資格・免許取得の勉強	全体	2.38	1.18	2.27	1.19
	男子	2.28	1.07	2.12	1.14
	女子	2.42	1.22	2.31	1.20
サークル・部活動	全体	3.37	1.32	3.23	1.31
	男子	3.30	1.31	3.12	1.30
	女子	3.39	1.33	3.26	1.32
スポーツディなどの 学内活動	全体	3.53	1.35	3.56	1.39
	男子	3.03	1.51	3.10	1.61
	女子	3.68	1.26	3.70	1.29
友人との付き合い（遊び）	全体	3.86	1.01	3.96	1.04
	男子	3.64	1.10	3.68	1.17
	女子	3.93	.97	4.05	.99
アルバイト	全体	3.80	1.22	3.73	1.25
	男子	3.67	1.08	3.67	1.13
	女子	3.84	1.26	3.75	1.29
ボランティア	全体	1.94	1.24	1.94	1.24
	男子	1.99	1.24	1.97	1.27
	女子	1.92	1.22	1.93	1.24
地域での活動	全体	1.59	.95	1.59	.98
	男子	1.70	1.16	1.66	1.10
	女子	1.56	.88	1.57	.95

3-2 進路選択自己効力得点

次に、「進路選択自己効力尺度」の30項目を合計し、「進路選択自己効力得点」を算出した。学年別・性別の進路選択自己効力得点は表2の通りであった。男子学生の方が進路選択自己効力得点が高いが、有意な性差は認められない。

表2 進路選択自己効力得点の平均と標準偏差（性別・学年別）

	2年生		3年生		全体	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
全体	79.53	14.70	80.93	14.25	79.95	14.56
男子	82.72	14.65	81.58	17.93	82.41	15.49
女子	78.46	14.61	80.74	13.16	79.16	14.19

3-3 進路探索行動得点

進路探索行動に関する15項目の合計を産出し、「進路探索行動得点」とした。表3に、学年別・性別の「進路探索行動得点」を示す。性別と学年の交互作用が有意であった ($F(1, 276)=5.32, p<.05$)。すなわち、2年生では男子の方が進路探索行動得点が高いが、3年生になると女子の方が進路探索行動得点が高くなるということである。学年の主効果、性別の主効果は認められなかった。

表3 進路探索行動得点の平均と標準偏差（性別・学年別）

	2年生		3年生		全体	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
全体	39.83	11.04	43.43	12.48	40.91	11.58
男子	41.17	11.57	38.33	13.64	40.39	12.13
女子	39.40	10.87	44.82	11.87	41.07	11.44

3-4 大学内外での取り組み・成果が進路選択自己効力に及ぼす影響

大学の内外での活動に積極的に取り組み、それらの活動を通して、成功体験や達成経験を積むことが進路選択自己効力を高めるのかを確認するため、大学内外での活動への取り組みおよびその成果を独立変数、進路選択自己効力得点を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。男女を込みにした全体の結果（表4）から、予習復習や資格取得など学習への取り組み、地域活動への取り組みが進路選択自己効力を高めることがわかる。また、アルバイトで成果を上げることや講義への取り組みがうまくいくことも進路選択自己効力を高めることがわかる。

同じ分析を男女別に行ったところ、男子は語学で成果を得られると、進路選択自己効力得点が向上する。また、講義への取り組みが進路選択自己効力得点を高め、地域活動への取り組みも進路選択自己効力を高める。しかし、ボランティア活動での成果はむしろ進路選択自己効力を低め

る方向に働くことがわかる（表5）。

一方、女子では、予習復習への取り組みが進路選択自己効力を高め、アルバイトで成果を得られると進路選択自己効力が向上する。地域での取り組みは進路選択自己効力を高め、講義で成果が得られると進路選択自己効力が向上する（表6）。

男子学生の数が少ないので、全体の傾向は女子の結果を反映すると思われるが、進路選択自己効力に影響する要因は男女でかなり異なることが分かる。

表4 重回帰分析（ステップワイズ法）の結果（全体）

	B
予復習取り組み	.185**
バイト成果	.178**
地域取り組み	.172**
講義成果	.176**
資格取り組み	.119*
R ²	.218**

表5 重回帰分析（ステップワイズ法）の結果（男子）

	B
語学成果	.401**
講義取り組み	.397**
地域取り組み	.470**
ボラ成果	-.378**
R ²	.540**

表6 重回帰分析（ステップワイズ法）の結果（女子）

	B
予復習取り組み	.216**
バイト成果	.203**
地域取り組み	.146*
講義成果	.150*
R ²	.171**

3-5 進路選択自己効力と進路探索行動との関係

大学の内外での活動に積極的に取り組み、それらの活動を通して、成功体験や達成経験を積むことが進路選択自己効力を高めるが、そのようにして向上した進路選択自己効力は積極的な進路探索活動を促すだろうと考えられる。そこで、次に、進路選択自己効力得点と進路探索行動得点(進路探索行動に関する15項目の合計)との関係について検討した(単回帰分析)。その結果、男女込みの全体では $R^2=.413$, $\beta=.643$, $p<.001$ 、男子では $R^2=.481$, $\beta=.693$, $p<.001$ 、女子では $R^2=.401$, $\beta=.633$, $t=11.83$, $p<.001$ であった。男女込みの全体でも、男女別々に検討した場合も、進路選択自己効力は進路探索行動を促すことがわかった。

4 考察

重回帰分析の結果、講義や予習復習への取り組みとその成果、資格取得への取り組みや語学学習の成果、地域活動への取り組みやアルバイトの成果は進路選択自己効力を高めることが分かった。そして、そのようにして高められた進路選択自己効力は進路探索行動を促進することが分かった。一方、友人との付き合い(遊び)やスポーツデイなどの学内活動、サークルや部活動、ゼミへの取り組みやその成果が進路選択自己効力を高める効果は認められなかった。

はじめにこの点について考察したい。本研究では、大学内外でのさまざまな活動に取り組むことによって進路選択自己効力が向上すると考えたが、ゼミやスポーツデイ・大学祭などの学内活動、サークル活動などは進路選択自己効力に影響しなかった。

本学はゼミを重視し、ゼミでの勉強・研究を通して学生を育てようとしている。また、学生の主体性を育てるうえでも、スポーツデイや大学祭などの学内活動やサークル活動や部活動などの課外活動を奨励している。しかし、これらの活動への取り組みやその成果が、進路選択自己効力を高めることはなかった。

大学での学びの根幹であるゼミでの取り組みや成果が進路選択自己効力に影響しないということは教員としては大きなショックである。また、学生の主体性や社会性を育む機会・場である学内活動、サークル・部活動が進路選択自己効力に寄与しないとすれば、課外活動を奨励することも難しくなる。このような結果をどのように解釈すればいいのだろうか。

予習復習、資格取得、語学学習などの活動は、学生が個人で取り組む活動であり、その成果も個人に帰属する。一方で、サークルや部活動、学内活動、ゼミ活動は集団での取り組みが多く、成果も個人のものとなりにくい側面がある。学生からすれば、これらの活動は集団での取り組みであり、集団の成果であって、個人の努力を明確にできないのではないだろうか。Bandura (1977) は課題を成功裡に遂行する経験(達成経験)をしても、それが教師や幸運などのおかげであると認知されると自己効力が増大しないと述べているが、集団での活動はその成果が個人に帰属され

にくいために、進路選択自己効力の向上にはつながらなかった可能性がある。

表1からも明らかのように、多くの学生がゼミに真剣に取り組んでおり、ゼミ活動から成果を得ていると答えている。先にも述べたように、ゼミは本学人文学部の教育の根幹でもある。本学では卒業論文作成が必修であり、学生はゼミ担当教員の指導のもと、各自の研究テーマに沿って、多くは一人で卒業論文を作成する。しかし、3年生のゼミ活動はグループワークなども多い。2年次の基幹演習（ゼミ）はグループでの活動が前提になっているし、1年次の基礎演習（ゼミ）は大学におけるクラスの役割も持っており、集団での活動も多いと思われる。学生からすれば、1年から3年までのゼミでの活動はゼミ生全体で取り組むものであり、その成果はゼミ全体で共有されるものと考えられているのかもしれない。

グループワークには多くの効果があるものと考えられる。しかし、それだけでは進路選択自己効力の向上は期待できない。グループワークを行いながらも、個人の取り組みを把握し、個人の成果を適切に示していくことにより、ゼミ活動が進路選択への自信につながっていき、進路探索行動も促進するのではないかと思われる。

本研究におけるもう一つの問題は、女子の分析結果における決定係数（ R^2 ）が男子の決定係数よりかなり小さいということである。統計的に有意でないなど、分析結果に問題があるわけではないが、決定係数はモデルの当てはまりを示す指標であることから、女子の結果は男子の結果よりも説明力が低いと考えられる。なぜこのようなことが起こったのか、このような結果は何を示しているのか、次にこの点について考えてみたい。

表1に示すように、女子の方が男子よりもさまざまな活動に積極的に取り組んでおり、成果を得ているにもかかわらず、その取り組みや成果と進路選択自己効力との結びつきは、男子の結びつきよりも弱いのである。

女子学生の進路選択への自信は、本研究で上げたような大学内外での活動によっては高められないのだろうか。富永（2000）は、女子大学生においては先輩や友人、家族や恋人などの助言といった「言語的説得」や先輩モデル、恋人モデル、家族モデルなどの「代理的経験」が自己効力に影響すると述べている。一方で、アルバイト経験のような遂行体験は自己効力にはあまり影響しないという。

このようなことから、女子においては遂行行動の達成（成功経験）よりも言語的説得や代理的経験の方が自己効力に影響するのかもしれない。女子の分析結果における決定係数（ R^2 ）が男子に比べて小さかったのは、本研究では遂行行動の達成（成功経験）が自己効力に及ぼす影響のみを検討したこと起因する可能性がある。

女子の進路選択自己効力が言語的説得や代理的経験によって高められるならば、女子の進路選択自己効力を高めるには、さまざまな機会に適切なロールモデルを提示したり、先輩からアドバイスを受けることができる機会を数多く提供するなど、女子に対するより積極的な関わりが必要になってくるとと思われる。

5 参考文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, *Psychological Review*, 84, 191-215.
- 金城 光 2008 進路選択に対する自己効力と職業不決断・実際の進路決定行動との関連—大学4年生を対象とした性差からの検討—, *キャリア教育研究*, 27, 15-23.
- 児玉真樹子・松田敏志・戸塚唯氏・深田博巳 2002 大学生の進路選択に及ぼす自己効力および職業的アイデンティティの影響, *広島大学心理学研究*, 2, 63-72.
- 楠奥繁則 2006 わが国の大学生における新路選択過程に対する自己効力研究の課題, *立命館経営学*, 45, 147-162.
- 西山 薫 2003 就職不安とプロアクティブパーソナリティ特性および自己効力に関する研究, *人間福祉研究*, 6, 137-148.
- 下山英雄・堀 洋元 2004 大学生の就職活動における情報探索行動：情報源の影響に関する検討, *社会心理学研究*, 20, 93-105.
- 柴田由巳・安住伸子 2011 女子大学生の進路選択に対する自己効力と進路探索行動—進路選択過程としての就職活動に着目して—, *キャリア教育研究*, 29, 71-80.
- Taylor, K. M. & Betz, N. E., 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision, *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81.
- 富永美佐子 2000 女子大学生の進路選択過程における自己効力, *進路指導研究*, 20, 21-31.
- 富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動, *発達心理学研究*, 8, 15-25.
- 浦上昌則 1994 女子学生の学校から職場への移行期に関する研究—「進路選択に対する自己効力」の影響—, *青年心理学研究*, 6, 40-49.
- 浦上昌則 1995 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究, *名古屋大学教育学部紀要*, 42, 115-126.
- 浦上昌則 1996 「進路選択に対する自己効力」の育成に関する予備的研究—ワークブックを用いた育成法について— *進路指導研究：日本進路指導学会研究紀要*, 17, 17-27.